



女子大学生の体育・スポーツに関する研究 (2) :
指導者への好意度を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉武, 信二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011277

論 文

「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(2)」

—指導者への好意度を中心に—

Studies on Physical Education and Sports of Women's Students in University (2)

—Mainly in the favor degree to the teacher and coach—

吉 武 信 二

Shinji YOSHITAKE

研究目的

現在、日常生活や生産様式の機械化およびマスコミの急速な発達によって、人間の身体運動が極度に制限され、生存の基盤である体力が低下する傾向にあることが、多くの人たちに指摘されている⁷⁾。一方、身体運動について学ぶ上で、最もその役割が大きいと思われる学校体育およびスポーツ活動の場面では、より効率の良い教育方法を求めてさまざまな角度から研究されてきた。また、体育授業に例をとると、教師中心から学習者中心の内容に移り変わり、その後しだいに教師と学習者とその基本的立場を持ちながら、特徴的な主役をともに負う形がつくられてきた⁷⁾ という歴史的な経緯がある。

これらの経緯も影響して、体育・スポーツに対する学習者の態度や志向性に関する研究が、数多く行われてきた。体育に対する態度研究は、石井ら³⁾、小林⁵⁾⁶⁾、丹羽ら¹¹⁾、徳永ら¹²⁾のもの、スポーツに対する態度研究は、橋本ら¹⁾²⁾、松島⁸⁾のもの、これらの態度研究にスポーツにおける志向性を加えた研究に、石井ら⁴⁾、中田ら⁹⁾¹⁰⁾、山本ら¹³⁾などがある。そして、さらに吉武ら¹⁴⁾は、女子大学生の学問専攻領域別にこれらを比較検討している。

これら先行研究は、運動経験や運動種目、運動部所属経験、大学生の学問専攻分野(学部・学科)による違いなどを、質的、量的側面でもとらえ、それが態度や志向性を規定する要因であるか否かを検討したものが多くある。これに対して、指導者への好意度からその違いを比較検討したものはあまり見あたらない。「先生が好きだったからその教科が好きになった」という話は、教育現場でしばしば耳にすることであり、指導者への好意度がこれらの志向性に何らかの影響を及ぼしている可能性は高い。したがって、これらの実態について調査・分析することは、現状を把握し、

現場の指導者にとって活動上、非常に有用であると考えられる。

そこで本研究では、今回は女子大学生を対象に、体育授業及びスポーツ活動に対する意識について調査し、指導者への好意度の違いという観点から分析することにより、女子大学生の体育授業及びスポーツ活動に対する意識と指導者の関係について、基礎的な知見を得ることを目的とした。

研究方法

2002年7月、O女子大学において、1年次に卒業必修科目として配当されている体育・スポーツ実技を中心とする科目である「基礎体育学」を履修している者のうち、アンケートに回答した187名を分析の対象とした。

アンケートは、先行研究で使用された「スポーツにおける志向性調査票」、「学生の運動に対する態度調査」を参考に、本研究の目的に関連した項目を検討した上で、「体育授業」と「スポーツ活動」について、その意識を調査するものを作成した。回答は得点の高い方から「非常にそう思う（5点）」「どちらかといえばそう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思わない（2点）」「全くそう思わない（1点）」の5段階から選択する無記名自己記入法により行い、その場で回収した。質問数は「体育授業に対する意識」と「スポーツ活動に対する意識」について、それぞれ31項目、計62項目である。

また、これらの項目の中には肯定的な質問項目48項目と否定的な質問項目14項目が含まれている。否定的な質問項目における否定回答は、体育授業やスポーツ活動に対する肯定的態度と解釈できるので、得点を反転させて「全くそう思わない（5点）」「どちらかといえばそう思わない（4点）」「どちらともいえない（3点）」「どちらかといえばそう思う（2点）」「非常にそう思う（1点）」とした。反転させた項目は、「体育授業」に関しては、項目3・4・9・10・13・15・17・18・20・24の計10項目、「スポーツ活動」に関しては、項目9・13・17・24の計4項目である。

分析は、全体の傾向と指導者の好意度別に見たグループ比較を中心に行った。また、統計処理については、統計ソフトSPSS for windows 11.0Jを用い、統計的な有意水準は危険率5%未満とした。

結果と考察

I. 全体の傾向

表1より、「体育授業」においては、平均点の高いものから順に、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「自分の能力を抑えなければならない」「ストレス発散に良かつ

表1 体育授業に関する意識

質 問 項 目	平均値 (S.D.)
24. 体育の授業では得るものが何もないと思う	4.05 (0.991)
27. 体育の授業は健康増進のために良いと思う	3.81 (1.033)
20. 体育の授業では自分の能力を抑えなければならないことがあった	3.79 (1.177)
21. 体育の授業はストレス発散に良かったと思う	3.63 (1.209)
23. 体育の授業は体力づくりに役立つものだと思う	3.59 (1.100)
4. 体育の授業では皆同じでなければならないという意識があったと思う	3.55 (1.218)
6. 体育の授業が好きだった	3.53 (1.395)
13. 体育の授業は喜びよりも苦しみが多かった	3.48 (1.243)
2. 体育の授業は良い人間関係を作ることができる場であったと思う	3.44 (1.117)
7. 体育の授業に対して、自発的に取り組むことができた	3.41 (1.291)
12. 体育の授業の後は、快い興奮が残った	3.39 (1.243)
3. 体育の授業は他の人に合わせなければならず、十分に楽しめなかったと思う	3.35 (1.113)
22. 体育の授業は生活に潤いをあたえてくれると思う	3.31 (1.246)
1. 体育の先生が好きだった	3.28 (1.297)
5. 体育の授業は友達を作る場として高く評価することができた	3.25 (1.134)
11. 体育の授業は遊びの延長として楽しんでいた	3.19 (1.313)
26. 体育の授業は普段の生活から解放された場であると思う	3.06 (1.206)
19. 体育の授業では自分の能力に合った活動をすることができたと思う	3.05 (1.039)
16. 体育の授業によってチャレンジ精神をかきたてられた	2.99 (1.135)
14. 体育の成績が良かった	2.97 (1.385)
10. 体育の授業では自由な選択ができなかったと思う	2.93 (1.294)
9. 体育の授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった	2.90 (1.135)
8. 体育の授業でスポーツが好きになった	2.86 (1.233)
28. 体育の授業によって物事に対して意欲的な人間になると思う	2.76 (0.993)
31. 体育の授業によって自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	2.75 (1.119)
18. 体育の授業ではうまくできるか不安に思うことが多かった	2.62 (1.236)
15. 体育の授業の評価方法が、技能重視であるのは賛成できない	2.54 (1.200)
29. 体育の授業によって情緒が安定した人間になると思う	2.51 (0.979)
30. 体育の授業によってプロポーションが良くなると思う	2.46 (1.118)
17. 体育の授業では自分の能力が足りないと感じることが多かった	2.45 (1.132)
25. 体育の授業で礼儀正しい態度が身につくと思う	2.36 (1.026)

※ 網掛は反転項目

たと思う」「体力づくりに役立つものだと思う」であった。「得るものが何もない」「自分の能力を抑えなければならない」については反転項目であるため、「何か得るものがある」「能力を抑えなければならないことはあまりなかった」と感じていることになる。特に「得るものが何もないと思う」についての回答は、平均値で4.00を超える高い値を示した。したがって、全体的には体育授業に対して、ストレス発散や体力づくり、健康への貢献をはじめ得るものがあるという意識を持っているものと考えられる。また、気を遣って自分の能力を思い切り発揮できないということはあまりない、すなわち思い切り自己の能力を発揮できる場としてとらえていることが推察される。

これに対して、平均点の低いものは、順に「礼儀正しい態度が身につくと思う」「自分の能力が足りないと感じることが多かった」「プロポーションが良くなると思う」「情緒が安定した人間になると思う」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」であった。「自分の能力が足りない

表2 スポーツ活動に関する意識

質 問 項 目	平均値 (S.D.)
24. スポーツ活動では得るものが何もないと思う	4.19 (0.930)
27. スポーツ活動は健康増進のために良いと思う	4.06 (0.880)
23. スポーツは体力づくりに役立つものだと思う	4.04 (0.925)
21. スポーツはストレス発散に良いと思う	3.94 (0.992)
6. スポーツをすることが好きである	3.85 (1.229)
10. スポーツはただ純粋に楽しむべきだと思う	3.79 (1.085)
12. スポーツ活動の後は、快い興奮が残る	3.77 (1.049)
2. スポーツ活動を通して、良い人間関係を得ることができると思う	3.72 (0.981)
22. スポーツ活動は生活に潤いを与えてくれるものだと思う	3.71 (1.065)
3. スポーツは気の合ったもの同士で楽しくできればよいと思う	3.68 (0.974)
5. スポーツ活動をすると、人と協力する習慣が身につくと思う	3.67 (0.974)
11. スポーツ活動は遊びの延長として楽しんでいる	3.62 (1.057)
13. スポーツ活動は喜びよりも苦しみが多いと思う	3.56 (1.026)
7. スポーツ活動に対して自発的に取り組むことができる	3.50 (1.175)
15. スポーツ活動に打ち込んだことがある	3.44 (1.429)
9. スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい	3.43 (1.046)
26. スポーツ活動は普段の生活から解放された場であると思う	3.41 (1.110)
19. スポーツ活動では自分の能力に合った活動をする事ができると思う	3.40 (1.064)
16. スポーツ活動によってチャレンジ精神をかきたてられる	3.36 (1.175)
28. スポーツ活動をすると、物事に対して意欲的な人間になると思う	3.32 (1.059)
31. スポーツ活動で自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	3.28 (1.087)
1. スポーツの指導者が好きだった	3.27 (1.153)
20. スポーツをする時は、常に勝ちたい	3.17 (1.288)
18. スポーツにおいて競争をすることが楽しい	3.16 (1.235)
8. スポーツ活動によって体育の授業が好きになった	3.12 (1.241)
30. スポーツ活動をすると、プロポーションがよくなると思う	3.06 (1.173)
4. スポーツ活動をすると、思いやりのある人間になると思う	2.98 (0.929)
25. スポーツ活動をすることで、礼儀正しい態度が身につくと思う	2.92 (1.124)
29. スポーツ活動をすると、情緒が安定した人間になると思う	2.90 (0.959)
14. スポーツは得意である	2.89 (1.406)
17. スポーツ活動では自分の能力が足りないと感じることが多い	2.47 (1.187)

※ 網掛は反転項目

と感じることが多かった」「評価方法が技能重視であるのは賛成できない」については反転項目であるため、「自分の能力が足りない」「技能重視は賛成できない」と感じる人が多かったと言える。したがって、全体的に体育授業によって礼儀正しい態度が身についたり、プロポーションが良くなったり、情緒が安定するとは考えておらず、自分の能力不足を感じながら、技能だけで成績評価をされることに抵抗を示していると推察される。

一方、表2より、「スポーツ活動」においては、平均点の高いものから順に、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「体力づくりに役立つと思う」「ストレス発散に良いと思う」「スポーツをすることが好きである」であった。これらにあがってきた項目は前述の体育授業の場合と同様な要因を含んでいる。平均値で4.00を超える高い値を示した項目は、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良いと思う」「体力づくりに役立つものだと思う」であ

り、体育授業の場合よりも項目は多い。したがって、全体的にスポーツ活動に対しても、ストレス発散や体力づくり、健康への貢献をはじめ得るものがあるという意識を持っているものと考えられる。また、スポーツをすること自体は好意的にとらえている様子がうかがえる。

これに対して、平均点の低いものは、順に「自分の能力が足りないと感じることが多い」「スポーツは得意である」「情緒が安定した人間になると思う」「礼儀正しい態度が身につくと思う」「思いやりのある人間になると思う」であった。「自分の能力が足りないと感じることが多い」については反転項目であるため、「能力が足りない」と感じる人が多かったと言える。したがって、全体的にスポーツ活動に対してやはり体育授業と同様の意識が含まれており、スポーツをすることによって礼儀正しい態度が身についたり、思いやりのある人間になったり、情緒が安定するとは考えておらず、自分の能力不足を感じながら、スポーツは不得意と意識していることが推察される。

以上のように、「体育授業」に対する考えと「スポーツ活動」に対する考えには、共通的な要因が含まれているなど、関連があることが予想される。そこで、両者にどのような関連があるのかを比較してさらに検討してみた。

まず、「体育授業」と「スポーツ活動」の上位5項目を見てみると、両者共に「何か得るものがある」「健康増進のために良い」「体力づくりに役立つ」「ストレス発散に良い」がある。したがって、どちらに対しても「何か得るものがある」と感じ、「健康増進」「体力づくり」「ストレス発散」によい影響を与えるとの考えを持っていると言える。これに対して、「体育授業」と「スポーツ活動」の下位5項目を見てみると、両者共に「自分の能力が足りない」「情緒が安定した人間になる」「礼儀正しさが身につく」が含まれている。したがって、どちらに対しても「能力不足」を感じており、「情緒安定」や「礼儀正しさ」に良い影響はないとの考えを持っていると言える。

次に、「体育授業」に対する考えと「スポーツ活動」に対する考えの違いを探るために、それぞれ31項目の中から同様な質問項目25項目を選び、有意差検定を行った。その結果、全体的に「スポーツ活動」の方が得点が高い傾向を示し、25項目中20項目において有意差が認められた。有意差のあった項目は、「体育授業またはスポーツ活動が好きである」「人間関係」「遊びの延長」「生活への良い影響」などである。いずれも「スポーツ活動」の得点の方が高く、より肯定的にとらえていることを示している。これに対して、有意差のなかった項目は、「先生・指導者が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「喜びよりも苦しみが多かった」「得意である」「自分の能力が足りないと感じる」の計5項目であった。前者3項目については、共に平均値が3.00以上であり、両者とも肯定的にとらえていると言える。一方、後者2項目については、共に平均値が3.00未満であり、両者とも否定的にとらえていると言える。

以上、体育授業とスポーツ活動に対する意識について比較した結果、全体的に共通する要因が多く、ややスポーツ活動の方がより好意的にとらえている傾向が見られた。ただし、先生や指導

者に対する好意度や体育・スポーツの得意度、能力不足という意識、楽しみや喜びを感じている意識といった要因については体育授業とスポーツ活動の間に差はないと推察される。

II. 指導者への好意度

体育授業に関して、「体育の先生が好きだった」の質問項目に対して4または5と回答した者を「先生が好き」、3と回答した者を「普通」、2または1と回答した者を「先生が嫌い」の3つのグループに分けて、比較検討を行った。各グループの全体に占める割合は図1に示した。同様にスポーツ活動に関して、「スポーツの指導者が好きだった」の質問項目に対して4または5と回答した者を「指導者が好き」、3と回答した者を「普通」、2または1と回答した者を「指導者が嫌い」の3つのグループに分けて、比較検討を行った。各グループの全体に占める割合は図2に示した。

図1より、体育の先生については約半数が好意的な回答を示し、「普通」の占める割合も考え合わせると、おおむね好意的な集団であったと言える。同様に図2より、スポーツの指導者についても若干「好き」と回答した割合が小さいものの、「嫌い」という回答の割合も小さくなっていることから、やはりおおむね好意的な集団であったととらえられる。

1. 体育授業について

表3は、指導者への好意度別に分けた各グループの平均値とその差について示したものである。これにより、まずは指導者への好意度別に分けた各グループの特徴を検討してみた。

(i) 体育の先生に対する好意度「好き」グループ

体育の先生が「好き」と回答したグループは、サンプル全体の46%を占めた。各項目に対

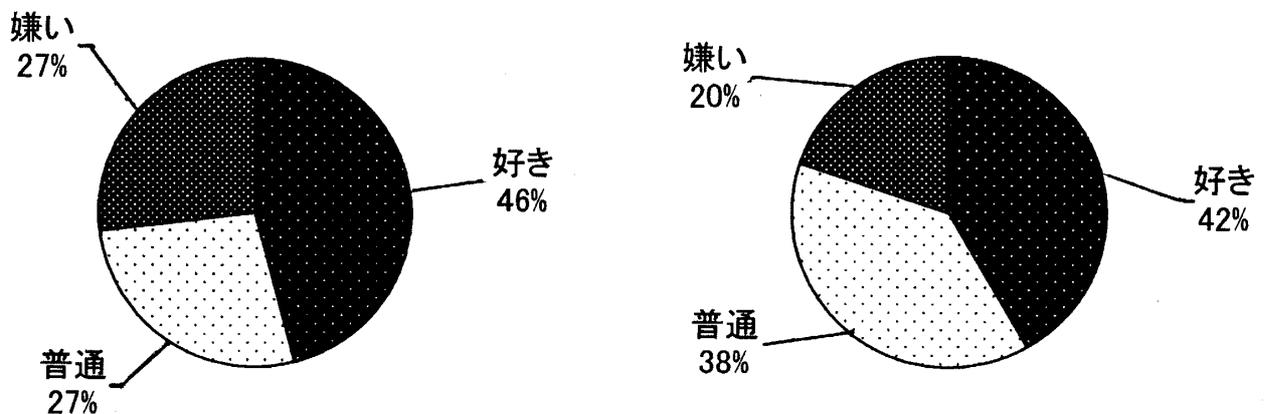


図1 体育教師への好意度によるグループの割合 図2 スポーツ指導者への好意度によるグループの割合

する平均値をみてみると、31項目中23項目において平均値が3.00以上であり、おおむね体育授業を肯定的にとらえていると思われる。その中でも特に平均値が比較的高い4.00以上の項目は、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他、「得るものが何もないと思う」「体育の授業が好きだった」「ストレス発散に良かった」の計4項目であった。これに対して平均値が3.00未満であった項目は低い順に、「礼儀正しい態度が身につく」「プロポーションが良くなる」「能力が足りないと感じることが多い」「評価方法が技能重視である

表3 体育教師への好意度別に見た体育授業に関する意識の比較

	質問項目	体育の先生が			平均値の差(有意水準)		
		好き	普通	嫌い	好き-普通	普通-嫌い	好き-嫌い
1	先生が好きだった	4.47	3.00	1.54	1.47 ***	1.46 ***	2.93 ***
2	良い人間関係を作ることができる場であったと思う	3.82	3.66	2.58	0.16	1.08 ***	1.24 ***
3	他の人に合わせなければならず十分に楽しめなかったと思う	3.69	3.38	2.72	0.31	0.66 **	0.97 ***
4	皆同じでなければならないという意識があったと思う	3.68	3.71	3.18	-0.03	0.53 *	0.50 *
5	友達を作る場として高く評価することができた	3.56	3.34	2.62	0.22	0.72 ***	0.94 ***
6	体育の授業が好きだった	4.22	3.50	2.38	0.72 ***	1.12 ***	1.84 ***
7	自発的に取り組むことができた	3.99	3.30	2.52	0.69 ***	0.78 **	1.47 ***
8	体育の授業でスポーツが好きになった	3.27	3.00	2.04	0.27	0.96 ***	1.23 ***
9	体育の授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった	3.04	2.88	2.68	0.16	0.20	0.36
10	自由な選択ができなかったと思う	3.34	2.78	2.38	0.56 **	0.40	0.96 ***
11	遊びの延長として楽しんでいた	3.55	3.28	2.50	0.27	0.78 **	1.05 ***
12	快い興奮が残った	3.85	3.30	2.72	0.55 **	0.58 *	1.13 ***
13	喜びよりも苦しみが多かった	3.94	3.58	2.60	0.36	0.98 ***	1.34 ***
14	体育の成績が良かった	3.41	2.94	2.26	0.47 *	0.68 **	1.15 ***
15	評価方法が、技能重視であるのは賛成できない	2.76	2.60	2.12	0.16	0.48 *	0.64 **
16	チャレンジ精神をかきたてられた	3.38	2.94	2.40	0.44 *	0.54 *	0.98 ***
17	自分の能力が足りないと感じることが多かった	2.71	2.58	1.90	0.13	0.68 **	0.81 ***
18	うまくできるか不安に思うことが多かった	2.98	2.69	1.94	0.29	0.75 ***	1.04 ***
19	自分の能力に合った活動をするのができたと思う	3.41	2.96	2.52	0.45 **	0.44 *	0.89 ***
20	自分の能力を抑えなければならないことがあった	3.74	3.76	3.90	-0.02	-0.14	-0.16
21	ストレス発散に良かったと思う	4.06	3.58	2.96	0.48 *	0.62 *	1.10 ***
22	生活に潤いをあたえてくれると思う	3.73	3.28	2.64	0.45 *	0.64 *	1.09 ***
23	体力づくりに役立つものだと思う	3.73	3.44	3.52	0.29	-0.08	0.21
24	得るものが何もないと思う	4.35	4.10	3.48	0.25	0.62 **	0.87 ***
25	礼儀正しい態度が身につくと思う	2.51	2.49	2.00	0.02	0.49 *	0.51 **
26	普段の生活から解放された場であると思う	3.29	3.20	2.51	0.09	0.69 **	0.78 ***
27	健康増進のために良いと思う	3.98	3.72	3.62	0.26	0.10	0.36
28	物事に対して意欲的な人間になると思う	2.94	2.70	2.52	0.24	0.18	0.42 *
29	情緒が安定した人間になると思う	2.76	2.54	2.06	0.22	0.48 *	0.70 ***
30	プロポーションが良くなると思う	2.64	2.42	2.22	0.22	0.20	0.42 *
31	自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	2.86	2.68	2.64	0.18	0.04	0.22

※ 網掛は反転項目

※ 有意水準 *P<0.05 **P<0.01 ***P<0.001

のは賛成できない」「情緒が安定した人間になる」など8項目であった。しかし、平均値2.00未満の項目は皆無であるため、強く否定するものではないと考えられる。したがって、このグループに属する者にとって、体育授業とは「好きで得るものがあり、ストレス発散に良いもの」であり、おおむね好意的な様子がうかがえる。

(ii) 体育の先生に対する好意度「普通」グループ

体育の先生に対して「普通」と回答したグループは、サンプル全体の27%を占めた。各項目に対する平均値をみると、31項目中18項目において平均値が3.00以上であり、体育授業をやや肯定的にとらえていると思われる。その中で特に平均値が比較的高い4.00以上の項目は、「得るものが何もないと思う」だけであった。以下、「自分の能力を抑えなければならない」「健康増進に良い」「体育の授業では皆同じでなければならない」「よい人間関係を作る場」などの項目があげられている。これに対して平均値が3.00未満であった項目は低い順に、「プロポジションが良くなる」「礼儀正しい態度が身につく」「情緒が安定した人間になる」など13項目であった。しかし、「好き」グループ同様、平均値2.00未満の項目は皆無であるため、強く否定するものではないと考えられる。したがって、このグループに属する者にとって、体育授業とは「得るものがあり、健康増進によいもの」であり、やや好意的な様子がうかがえる。ただし、自分の能力を抑制したり、皆と同じようにしなければならないといった感覚は、「好き」グループよりも弱いことが推察される。

(iii) 体育の先生に対する好意度「嫌い」グループ

体育の先生に対して「嫌い」と回答したグループは、サンプル全体の27%を占めた。各項目に対する平均値をみると、31項目中5項目が平均値が3.00以上であり、残り26項目は否定的な結果を示した。よって、体育授業を否定的にとらえていると思われる。また、「好き」「普通」グループに見られた平均値4.00以上の項目は皆無である。逆に「好き」「普通」グループには見られなかった平均値が比較的低い2.00未満の項目として、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他「自分の能力が足りない」「うまくできるか不安」の計3項目があげられている。したがって、このグループに属する者にとって、体育授業とは「自分の能力不足を感じながら、うまくできるかどうかの不安を抱いているもの」であり、やや否定的な様子がうかがえる。

次に上記3つのグループについてそれぞれのグループ間で比較してみた。3グループ間すべてに有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他、「体育

の授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「快い興奮が残った」「体育の成績が良かった」「チャレンジ精神をかきたてられた」「自分の能力に合った活動をする事ができた」「ストレス発散に良かった」「生活に潤いをあたえてくれる」の計9項目であった。そして先生への好意度が高いほど肯定的な回答を示す傾向がある。したがって、教師への好意度は、生徒の積極的な体育への取り組みや考え方との関係が非常に深いものであると考えられる。これに対して3グループ間すべてに有意差のなかった項目は「体育の授業以外のスポーツ活動の方が楽しかった」「自分の能力を抑えなければならない」「体力づくりに役立つ」「健康増進のためによい」「自分の体調をコントロールする能力が身につく」の5項目であった。これらの項目は、指導者への好意度とあまり関係がないと考えられる。

「好き」—「普通」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「体育の授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「自由な選択ができなかった」「快い興奮が残った」「ストレス発散に良かった」など10項目であった。よって指導者への好意度が高い者と普通の者で、これらの要因で意識の違いがあると考えられる。しかし、平均値の差で1.00を超えるほどの大きな違いは、グループ分けの変数となった項目以外はみられず、意識の差の大きさについてはさほどではないと推察される。

「普通」—「嫌い」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「体育の授業が好きだった」「良い人間関係を作ることができる場」「喜びよりも苦しみが多かった」「体育の授業でスポーツが好きになった」「自発的に取り組むことができた」など23項目であった。よって指導者への好意度が普通の者と低い者で、これらの要因で意識の違いがあると考えられる。さらに、平均値の差で1.00を超える項目として3項目あげられており、そのすべてが肯定的対否定的であることから考えると、これらの要因に関しては大きな意識の違いがあると考えられる。

「好き」—「嫌い」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「体育の先生が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「体育の授業が好きだった」「自発的に取り組むことができた」「喜びよりも苦しみが多かった」「良い人間関係を作ることができる場」「体育の授業でスポーツが好きになった」など26項目であった。よって指導者への好意度が高い者と低い者で、これらの要因で意識の

違いがあると考えられる。さらに、平均値の差で1.00を超える項目が12項目もあげられており、そのほとんどが肯定的対否定的であることから考えると、これらの要因に関しては大きな意識の違いがあるにとらえられる。

2. スポーツ活動について

表4は、指導者への好意度別に分けた各グループの平均値とその差について示したものである。これにより、まずは指導者への好意度別に分けた各グループの特徴を検討してみた。

(iv) スポーツ指導者に対する好意度「好き」グループ

指導者が「好き」と回答したグループは、サンプル全体の42%を占めた。各項目に対する平均値をみると、31項目中30項目において平均値が3.00以上であり、スポーツ活動を肯定的にとらえていると思われる。特に平均値が比較的高い4.00以上の項目は、グループ分けの変数となった「スポーツの指導者が好きだった」の他、「得るものが何もないと思う」「スポーツをすることが好きである」「体力づくりに役立つ」「健康増進のために良い」「生活に潤いを与えてくれる」「ストレス発散に良い」「良い人間関係を得ることができる」「快い興奮が残る」の計9項目であった。これに対して平均値が3.00未満であった項目は、「自分の能力が足りないと感じることが多い」のみであり、2.63という平均値から考えても強く否定するものではないと考えられる。したがって、このグループに属する者にとって、スポーツ活動とは「好きで得るものがあり、健康や体力の維持増進に役立ち、良い人間関係を獲得でき、生活に潤いと快い興奮を与え、ストレス発散に良いもの」であり、非常に好意的な様子が見えがえる。

(v) スポーツ指導者に対する好意度「普通」グループ

スポーツ指導者に対して「普通」と回答したグループは、サンプル全体の38%を占めた。各項目に対する平均値をみると、31項目中26項目において平均値が3.00以上であり、スポーツ活動をおおむね肯定的にとらえていると思われる。その中で特に平均値が比較的高い4.00以上の項目は、「得るものが何もないと思う」「健康増進のために良い」の2項目であった。以下、「体力づくりに役立つ」「ストレス発散に良い」「ただ純粋に楽しむべき」「人と協力する習慣が身につく」などの項目があげられている。これに対して平均値が3.00未満であった項目は低い順に、「自分の能力が足りないと感じることが多い」「スポーツは得意である」「プロポーションが良くなる」「礼儀正しい態度が身につく」「情緒が安定した人間になる」の5項目であった。しかし、「好き」グループ同様、平均値2.00未満の項目は皆無である

ため、強く否定するものではないと考えられる。したがって、このグループに属する者にとって、スポーツ活動とは「得るものがあり、健康増進によいもの」であり、やや好意的な様子が見えがえる。

(vi) スポーツ指導者に対する好意度「嫌い」グループ

スポーツ指導者に対して「嫌い」と回答したグループは、サンプル全体の20%を占めた。

表4 スポーツ指導者への好意度別に見たスポーツ活動に対する意識の比較

	質問項目	スポーツの指導者が			平均値の差 (有意水準)		
		好き	普通	嫌い	好き-普通	普通-嫌い	好き-嫌い
1	スポーツの指導者が好きだった	4.38	3.00	1.49	1.38 ***	1.51 ***	2.89 ***
2	良い人間関係を得ることができると思う	4.09	3.76	2.89	0.33 *	0.87 ***	1.20 ***
3	気の合ったもの同士で楽しくできればよいと思う	3.73	3.58	3.76	0.15	-0.18	-0.03
4	思いやりのある人間になると思う	3.18	3.07	2.41	0.11	0.66 ***	0.77 ***
5	人と協力する習慣が身につくと思う	3.78	3.79	3.17	-0.01	0.62 **	0.61 **
6	スポーツをすることが好きである	4.32	3.75	3.05	0.57 ***	0.70 *	1.27 ***
7	自発的に取り組むことができる	3.92	3.41	2.78	0.51 **	0.63 *	1.14 ***
8	スポーツ活動によって体育の授業が好きになった	3.49	3.21	2.16	0.28	1.05 ***	1.33 ***
9	スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい	3.13	3.35	4.22	-0.22	-0.87 ***	-1.09 ***
10	ただ純粋に楽しむべきだと思う	3.78	3.79	3.81	-0.01	-0.02	-0.03
11	遊びの延長として楽しんでいる	3.77	3.58	3.41	0.19	0.17	0.36
12	快い興奮が残る	4.09	3.65	3.35	0.44 **	0.30	0.74 **
13	喜びよりも苦しみが多いと思う	3.87	3.41	3.22	0.46 **	0.19	0.65 **
14	スポーツは得意である	3.21	2.79	2.43	0.42	0.36	0.78 **
15	スポーツ活動に打ち込んだことがある	3.75	3.44	2.81	0.31	0.63 *	0.94 **
16	チャレンジ精神をかきたてられる	3.70	3.24	2.92	0.46 *	0.32	0.78 ***
17	自分の能力が足りないと感じることが多い	2.63	2.38	2.30	0.25	0.08	0.33
18	競争をすることが楽しい	3.43	3.21	2.50	0.22	0.71 **	0.93 ***
19	自分の能力に合った活動をするができると思う	3.68	3.31	3.00	0.37 *	0.3	0.68 **
20	スポーツをする時は常に勝ちたい	3.22	3.31	2.78	-0.09	0.53 *	0.44
21	スポーツはストレス発散に良いと思う	4.14	3.92	3.54	0.22	0.38	0.60 *
22	生活に潤いを与えてくれるものだと思う	4.16	3.61	2.97	0.55 ***	0.64 **	1.19 ***
23	スポーツは体力づくりに役立つものだと思う	4.24	3.99	3.73	0.25	0.26	0.51 **
24	スポーツ活動では得るものが何もないと思う	4.44	4.14	3.78	0.30 *	0.36	0.66 **
25	礼儀正しい態度が身につくと思う	3.04	2.94	2.62	0.10	0.32	0.42
26	普段の生活から解放された場であると思う	3.66	3.35	3.00	0.31	0.35	0.66 **
27	健康増進のために良いと思う	4.21	4.07	3.73	0.14	0.34	0.48 **
28	物事に対して意欲的な人間になると思う	3.53	3.34	2.84	0.19	0.50 *	0.69 **
29	情緒が安定した人間になると思う	3.06	2.96	2.43	0.10	0.53 **	0.63 ***
30	プロポジションがよくなると思う	3.31	2.86	2.95	0.45 *	-0.09	0.36
31	自分の体調をコントロールする能力が身につくと思う	3.64	3.10	2.89	0.54 **	0.21	0.75 ***

※ 網掛は反転項目

※ 有意水準 * P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001

各項目に対する平均値をみると、31項目中14項目において平均値が3.00以上であり、残り17項目は3.00未満の否定的な結果を示した。よって、スポーツ活動については肯定否定の両方の意識を持っていると思われる。特に平均値が比較的高い4.00以上の項目は、「スポーツ活動よりも体育授業の方が楽しい」だけであった。この項目は反転項目であるため、「体育授業よりはスポーツ活動の方が楽しい」との考えが強いと解釈できる。次いで「ただ純粋に楽しむべき」「得るものがなにもない」「気の合ったもの同士で楽しくできればよい」などの項目が続いている。これらの項目の中には「好き」「普通」グループで際立って上位には見られなかった項目が含まれており、このグループの特徴を示したものととらえられる。これに対して、平均値が比較的低い2.00未満の項目は、グループ分けの変数となった「スポーツの指導者が好きだった」のみであった。次いで「スポーツ活動で体育の授業が好きになった」「自分の能力が足りないと感じる」「思いやりのある人間になる」などの項目が続いている。これらの項目の中にも「好き」「普通」グループで際立って下位に見られなかった項目が含まれており、このグループの特徴を示したものととらえられる。したがって、このグループに属する者にとって、スポーツ活動とは「得るものがあり、気の合ったもの同士が、ただ純粋に楽しむべきものであり、それによって体育の授業が好きになったり、思いやりのある人間になったりすることはない。また、自分の能力不足を強く感じている」というものである。よって、肯定否定の両方の意識を共有している様子がうかがえる。

次に上記3つのグループについてそれぞれのグループ間で比較してみた。3グループ間すべてに有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「スポーツ指導者が好きだった」の他、「良い人間関係を得る」「スポーツをすることが好きである」「自発的に取り組むことができる」「生活に潤いをあたえてくれる」の計4項目であった。そして、指導者への好意度が高いほど肯定的な回答を示す傾向がある。したがって、指導者への好意度は、被指導者の積極的なスポーツ活動への取り組み、良い人間関係の育成、日常生活上の精神的な充実と関係が非常に深いものであると考えられる。これに対して3グループ間すべてに有意差のなかった項目は「気の合ったもの同士が楽しくできればいい」「ただ純粋に楽しむべき」「遊びの延長として楽しんでいる」「自分の能力が足りないと感じる」「礼儀正しい態度が身につく」の5項目であった。これらの項目は、指導者への好意度とあまり関係がないと考えられる。

「好き」―「普通」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「スポーツの指導者が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「スポーツをすることが好きである」「生活に潤いを与えてくれる」「自

分の体調をコントロールする能力が身につく」「自発的に取り組むことができる」など12項目であった。よって指導者への好意度が高い者と普通の者で、これらの要因で意識の違いがあると考えられる。しかし、平均値の差で1.00を超えるほどの大きな違いは、グループ分けの変数となった項目以外はみられず、意識の差の大きさについてはさほどではないと推察される。

「普通」－「嫌い」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「スポーツの指導者が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「スポーツ活動によって体育の授業が好きになった」「良い人間関係を得ることができる」「スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい」「競争することが楽しい」「スポーツをすることが好きである」など14項目であった。よって指導者への好意度が普通の者と低い者で、これらの要因で意識の違いがあると考えられる。さらに、平均値の差で1.00を超える項目として3項目あげられており、そのすべてが肯定的対否定的であることから考えると、これらの要因に関しては大きな意識の違いがあるにとらえられる。

「好き」－「嫌い」間比較

有意差のあった項目は、グループ分けの変数となった「スポーツの指導者が好きだった」の他、平均値の差が大きい順に、「スポーツ活動によって体育の授業が好きになった」「スポーツをすることが好きである」「良い人間関係を得ることができる」「生活に潤いを与えてくれる」「自発的に取り組むことができる」「スポーツ活動よりも体育の授業の方が楽しい」など24項目であった。よって指導者への好意度が高い者と低い者で、これらの要因で意識の違いがあると考えられる。さらに、平均値の差で1.00を超える項目が7項目もあげられており、そのほとんどが肯定的対否定的であることから考えると、これらの要因に関しては大きな意識の違いがあるにとらえられる。

以上の結果より、体育の授業、スポーツ活動ともに、指導者への好意度は被指導者の体育・スポーツに対する意識や考え方に大きな影響を及ぼす可能性が明らかとなった。指導者はその存在と影響力の大きさを自覚することが必要であろう。同時に被指導者がより効率的に体育・スポーツに関わるためには、指導者は被指導者に信頼され、高い好意度を得られる存在になるように努めること、体育・スポーツのもたらす心身の有益な効果について十分に意識させるよう努めること、良い人間関係を育てる機会となるような内容を充実させることなどに留意する必要性が示唆された。しかし、この要因の詳細を分析するには、さらなる研究が必要であると考えられる。

ま と め

本研究では、アンケート調査の結果から、体育・スポーツに対する意識についての全体的傾向と”指導者への好意度の違い”から分けられたグループの特徴およびグループ間の差について検討した。結果を要約すると以下ようになる。

I. 全体の傾向

- ・体育授業では「健康増進」「ストレス発散」「体力づくり」に良い影響を与えると感じていた。逆に、体育授業による「礼儀正しさの獲得」「プロポーション向上」「情緒安定」などの効果はあまり認めておらず、「自分の能力不足」を感じ、「技能重視の評価方法」に反対していた。
- ・スポーツ活動では「健康増進」「体力づくり」「ストレス発散」に良い影響を与えると感じ、「スポーツをすることが好きである」と感じていた。逆に、スポーツ活動による「礼儀正しさの獲得」「情緒安定」「思いやりのある人間になる」などの効果はあまり認めておらず、「自分の能力不足」を感じ、「スポーツは不得意である」と感じていた。
- ・体育授業とスポーツ活動を比較すると、「活動への好意度」「人間関係」「遊びの感覚」「生活への良い影響」に対する意識に有意な差があり、スポーツ活動の方が好意的にとらえられていた。一方で、「指導者への好意度」「自主性」「活動への得意度」「能力」に対する意識に有意な差はなかった。

II. 指導者の影響

1. 体育授業における「指導者への好意度」

- ・好意度が高いグループはおおむね体育授業を肯定的にとらえていた。特に「好きで得るものがあり、ストレス発散に良いもの」との意識が顕著であった。これに対して、礼儀正しい態度やよいプロポーション、情緒安定の獲得などはあまり期待していなかった。
- ・好意度が中程度のグループは、体育授業をやや肯定的にとらえていた。特に「得るものがあり、健康増進によいもの」との意識が顕著であった。これに対して、礼儀正しい態度やよいプロポーション、情緒安定の獲得などはあまり期待していなかった。
- ・好意度が低いグループは、体育授業を否定的にとらえていた。特に「自分の能力不足を感じながら、うまくできるかどうかの不安を抱いているもの」との意識が顕著であった。
- ・好意度で分けたすべてのグループで有意差がみられたのは、授業への好意度、自発性、得意度、ストレス発散などの精神的充足感についての項目が多く含まれていた。そして指導者への好意度が高いほど肯定的な回答を示す傾向があった。逆にすべてのグループに有意差のな

かった項目は、健康・体力増進、自己の体調コントロールなどの身体的発達についての項目が多く含まれていた。

- ・好意度で分けたグループ間の比較から、「好き」—「普通」間には、授業への好意度、自発性、快い興奮やストレス発散など精神的充足感についての項目に有意差は見られたものの、平均値の差の値は比較的小さかった。これに対して「普通」—「嫌い」間には授業への好意度、自発性などの項目で比較的大きな有意差が認められた。また、「好き」—「嫌い」間ではさらに多くの項目で大きな有意差が認められた。

2. スポーツ活動における「指導者への好意度」

- ・好意度が高いグループはスポーツ活動を肯定的にとらえていた。特に「好きで得るものがあり、健康や体力の維持増進に役立ち、良い人間関係を獲得でき、生活に潤いと快い興奮を与え、ストレス発散に良いもの」との意識が顕著であった。一方で「自分の能力不足」もやや感じていた。
- ・好意度が中程度のグループは、スポーツ活動をおおむね肯定的にとらえていた。特に「得るものがあり、健康増進によいもの」との意識が顕著であった。これに対して、礼儀正しい態度やよいプロポーション、情緒安定の獲得などはあまり期待していなかった。また、自分の能力不足を少々感じていた。
- ・好意度が低いグループは、スポーツ活動に対して肯定否定の両方の意識を持っていた。すなわち「得るものがあり、気の合ったもの同士が、ただ純粋に楽しむべきものであり、それによって体育の授業が好きになったり、思いやりのある人間になったりすることはない。また、自分の能力不足を強く感じている」というものであった。
- ・好意度で分けたすべてのグループで有意差がみられたのは、活動への好意度、人間関係、自発性、生活への潤いなど、精神的充足感についての項目が多く含まれていた。そして指導者への好意度が高いほど肯定的な回答を示す傾向があった。逆にすべてのグループに有意差のなかった項目は、自分の能力不足や礼儀正しさ、遊びの延長などについての項目が多く含まれていた。
- ・好意度で分けたグループ間の比較から、「好き」—「普通」間には、活動への好意度、自発性、生活への潤いなどの項目に有意差は見られたものの、平均値の差の値は比較的小さかった。これに対して「普通」—「嫌い」間には活動への好意度、人間関係、競争性などの項目で比較的大きな有意差が認められた。また、「好き」—「嫌い」間ではさらに多くの項目で大きな有意差が認められた。

以上、体育授業においてもスポーツ活動においても、指導者への好意度が高いと活動を好意的にとらえる傾向にあり、体育教師・スポーツの指導者の影響が大きいことが明らかになった。よって、指導者はその存在と影響力の大きさを自覚して指導にあたる必要性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) 橋本 勲・石井源信・中村寿博「スポーツに対する研究」中京女子大学紀要 11:69-79,1976
- 2) 橋本 勲「スポーツに対する態度の研究」体育の科学 29- 3 :213-217,1979
- 3) 石井源信・藤江 学「大学体育実技における体力および態度の効果に関する研究」東京工業大学人文論叢 5 : 1-14,1979
- 4) 石井源信・岩本良裕・古屋正俊「体育・スポーツに対する態度および志向性を規定する要因分析」東京工業大学人文論叢 9 :115-127,1983
- 5) 小林 篤「大学保健体育科目に対する学生の態度構造に関する研究Ⅱ」名古屋大学教養部紀要 12:87-105,1968
- 6) 小林 篤「体育の授業研究」大修館書店:p.279,1982
- 7) 松田岩男・宇土正彦「体育科教育法」大修館書店:p4,p81,1984
- 8) 松島 宏「運動に対する態度についての研究Ⅰ」武蔵野女子大学紀要 9 :171-190,1974
- 9) 中田順造・山本章雄・尾縣 貢・熊安貴美江「大阪女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1)」大阪女子大学紀要 24:39-55,1987
- 10) 中田順造・山本章雄・熊安貴美江・吉武信二・尾縣 貢「大阪女子大学生の体育・スポーツに関する研究(2)」大阪女子大学紀要 28:55-69,1991
- 11) 丹羽劭昭・長沢邦子・浅井 修「女子大生の体育実技への態度を規定する要因の検討」体育学研究 25- 4 :251-260,1981
- 12) 徳永幹雄・荒井貞光「学生の体育実技にたいする態度変容とその要因(第2報)」体育学研究 18- 5 :287-294,1974
- 13) 山本章雄・中田順造・尾縣 貢・熊安貴美江「女子大学生の体育・スポーツに対する態度及びスポーツにおける志向性に関する研究」大阪体育学研究 26: 9-15,1988
- 14) 吉武信二・中田順造・山本章雄・熊安貴美江「女子大学生の体育・スポーツに関する研究(1)-専攻分野から見た体育の授業とスポーツに対する態度および志向性-」大阪女子大学紀要 36:39-51,1999